

学校活性のヒント

秋田県立湯沢高校

具体的な資料を用いて

保護者をも重視した

細やかな学習支援を実施

秋田県立湯沢高校では、全学年において地区別の保護者会を実施している。保護者を学校に招く形態とは異なり、担任が各地区の会場に向き、担任する生徒の保護者と面談を行うというスタイルだ。99年度、2年生のクラス担任を務めた菅原敏紀先生はこう語る。

「各地区の会場で、担任が保護者に対して生徒の学習・生活状況について話します。7月の下旬から2か月ほどかけて六つの地区を回るんです。地域との連携を密接にして、普段、不安や疑問に思っていることを自由に保護者に話してもらいたい。また、同じ年代の子どもを持つ近隣の保護者同士が、積極的に情報を交換できる場にもしてもらいたいと考えています」

だが、同校の保護者会の特徴は、地区別の実施形態だけでなく、保護者一人ひとりに対して、生徒の学習上の問題点、課題、その解決のための方策までを具体的に伝えていく点である。

保護者にも理解しやすい資料

「本校は地域の中核校ですが、受験に対する生徒の意識は、秋田市や仙台市などの都市部の進学校に比べると決して高くありません。中学校時代に一生懸命勉強した経験がないまま入学してくる生徒も多いんです。当然、1年次の7月に行われる最初の模試の段階で、他校と成績の差が付いてしまいます」（菅原先生）

生徒たちの高い潜在能力を生かすためには、担任が個々の生徒に対して学習上の問題点、各

教科別の勉強の仕方を理解させ、さらに受験への意識付けを行う必要がある。そして、生徒のみならず、家庭で生徒を見守る保護者に対しても生徒同様の理解を求めようというのだ。だが、高校での学習に関する話題は、やはり保護者にとって容易に理解できるものとは言い難い。そこで同校では「スタディーサポート」（国語、数学、英語の3教科に関する生徒の学習状況と学力調査を基に個別指導をサポートするシステム）を入学直後に実施し、その結果を資料として保護者との面談を行うようにしている。

『スタディーサポート』の結果を基に、まず生徒と面談を行い、結果を確認して『保護者会

らい大変なことで、3年間何をどんな風に勉強すればよいのかをきちんと理解している生徒、保護者は少ないよつです」（真壁先生）と言つた。

「低学年次に苦手科目を多く抱えていては、3年生になって建て直しが利きません。できるだけ早い時期に、学校の授業と家庭学習の重要性を生徒にも保護者にも理解してもらわないといけません。中学校のときはこの部分が苦手だったので、高校ではこんな力を付けさせるための課題を、こんな風に与えているのだ」ということをきちんと伝え、納得してもらうことが重要です。その具体的な理解のために『スタディーサポート』を活用しているのです。例えば、模試の偏差値だけを見ながら話しても、低学年次の生徒や保護者にとっては、何をどうすればよいかまでは分からなくて、抽象的な面談になってしまいがちです。どこが弱い、ノート

取り方など勉強の仕方のごがよくない、そんな具体的な話ができた方が、生徒も保護者も日々の生活の中に生かしやすいはず」（菅原先生）

同校では、1年次の夏休み明けと2年次の1学期にも「スタディーサポート」を実施する。高校生活にある程度慣れてきた1年生に対しては、学習上のつまづきはないか、勉強のリズムはできているかを確認し、また中たるみの傾向がある2年生には、基礎学力の足りない部分など、夏休みの課題を見つけ、受験勉強への動機付けとすることをねらいとしている。

『スタディーサポート』や模試の結果が出たときなど、本校の教師は頻りに生徒との面談を行っている。Eメールシステム（学習や進路に関する情報をインターネットの環境を利用して取り出せるシステム）を活用して、成績変動や教科バランスなどのデータをパソコンの画面に表示させながら、生徒と面談を行う教師も多いです」（菅原先生）

多様できめ細かな指導を

「スタディーサポート」実施後、個人票と共に『スタディーナビゲーター』（基礎学力養成の



菅原敏紀
99年度は第2学年クラス担任、進路指導部副主任、国語担当。同校に赴任して7年目。「周りの人のアドバイスをよい方向に生かせる生徒を育てたいと思います」



真壁聡子
99年度は第1学年クラス担任、英語担当。同校に赴任12年目。「自分は何をしたいのか、将来どうなりたいのか、そんな希望、夢をしっかりと持った生徒を育てたいです」

秋田県立湯沢高校

1943年創立。共学の普通科高校。99年度は全21クラスで、生徒数は858名。99年度入試では、秋田大11名、東北大6名、東京学芸大5名、筑波大4名など、公立大に123名合格。建学の心である「師弟共励」の下、文武両道の実践に取り組む。99年度はハンドボール部、水泳部、陸上部がインターハイ、国体に出場。

ではこんなことをお話しするよ」と伝えておきます。そして、保護者に対しても『お子さんは家庭学習時間が少ないようです。中学校時代の学習では英語の語彙力、数学の計算力が少し足りなかったよつですね』などと、ここでも『スタディーサポート』の結果を見ながら、具体的にどの部分が欠けていて、どの部分を勉強させればよいかを説明しています」（99年度1学年担任・真壁聡子先生）

より具体的な指針を提示

同校では、入学直後はクラスほぼ全員が公立大を志望している。しかし、それがどれく

ための学習上のアドバイスが紹介された情報誌（生徒全員に配付されるが、同校ではそのシーンでも独自の工夫を行っている）

『スタディーサポート』の結果から、本校の生徒が共通して弱い部分も見えてきます。そこで学年集会の場を使い、強化したい分野の学習法が紹介されている『スタディーナビゲーター』のページをコピーして、生徒に配っています。もう一度全員に確認させたい所は、全員がいる場で改めて話す、というわけです」（真壁先生）

「本校の指導は、どちらかと言えば教師主導型かも知れませんが」と菅原先生。生徒、保護者に対して学習上のアドバイスを詳細に行う面談の他にも、1、2年生を対象にした学習台宿など、生徒の学習意欲を高めるために教師から働き掛ける場面は少なくない。「自ら学ぶ生徒を育てるためにも、どこかで手を離さないとけない。でも、最近の生徒は徐々に受け身になっているし、教師も不安なのかも知れませんが、それは本校の課題でもあります」（真壁先生）という思いもある。

しかし、菅原先生は「教師の一言一言を素直に受け止め、それに応えようという気持ちを抱くのは、本校の生徒たちのよい伝統」とも語る。「生徒が教師にアドバイスを求めている以上、我々も『こうしてみようよ』と各生徒に応じた細やかな指導を行いたいと思っています。『スタディーサポート』の活用をはじめ、具体的に多様な指導を考えていきたいですね」（菅原先生）